

遊びと  
児童館

# いわて 児童館テキスト

～遊びがはぐくむ心とからだ～



## \* も く じ \*

I 児童館が持つべき子ども観とは	3
II 遊びと児童館	5
II-1 子育て環境を見直す必要性	5
1) 子どもの姿は「見ない?」「見えない?」	5
2) それでも子どもたちは遊んでいる	5
3) ランキングに縛られる子どもたち	6
4) 子どもと遊びを考えるー大切にしたい視点	7
II-2 子どもの発達と遊び	8
1) 子どもにとって遊びとは	8
2) 子どもの目線に立つ	9
3) 主役は子どもたち	9
A 乳児期	10
B 幼児期	12
C 児童期	14
4) 心に寄り添う	16
II-3 児童館での遊び	16
1) 児童館での遊びの支援とは	16
2) 「遊びの支援」で心がけたい目標	17
3) 仲間集団を育む大切さ	18
II-4 児童館職員との座談会「遊びを通して子どもたちにどう関わっていますか?」	19
III これからの児童館に期待される役割	30
III-1 地域の児童福祉の拠点としての児童館	30
1) 児童福祉としての児童館	30
2) 児童館におけるソーシャルワーク	30
3) 児童館での相談活動	31
III-2 地域の中で果たすべき児童館の役割	32
1) 遊びの提供から子育て支援へ	33
2) 児童館を地域のつながりをうながすコア施設に	34
III-3 児童厚生員に求められる資質	35
1) 児童館の意義・児童厚生員の役割	35
2) 子どもが主体になる	36
3) 子どもとの関わりから学ぶー児童厚生員の人間性ー	37
4) つながる力・つなげる力ー成功例からは盗む、失敗からは学ぶー	37
IV あとがき	38

執筆者 いわて子どもの森 館長 吉成信夫 (I、III-2)  
弘前大学 生涯学習教育センター 講師 深作拓郎 (II-1・3、III-1・3)  
日本工学院 八王子専門学校 講師・学校心理士 神田奈保子 (II-2)



## I 児童館が持つべき子ども観とは

いわて子どもの森 館長 吉成 信夫

どういう子どもに育てたいかという標語とか目標がよく学校の教室に貼られていますね。でも、児童館で言う子ども観と少し異なる感じが私はします。建前と本音の違いと言っては言い過ぎでしょうか。勉強も大切だけれど、本音で言えば、こういう風に育てたいというおとなの意図や目的をどうしたたかにすり抜けて、子どもたちがいきいきとした自分に出会い、自分を獲得していくたくましさを身につけて成長してほしいとも思うのです。

児童館の存在価値は、子どもたちが自主的、自発的、選択的に、生きる力を育みあい、自己肯定的なものを育てていく環境を保障しようとするところにこそあると思うのです。あくまでも主体は子ども自身にあります。このような支援をどのような考え方で一貫して通していくのか。そこにその児童館なりの、その児童厚生員なりの「子ども観」を持つ必要性があるのです。子どもと関わる上で最も大切にしている考え方のことを「子ども観」と呼びたいと思います。

子どもの森が開館する時に、館の考え方をひとつのフレーズに込めて集約しました。「おとなも、子どもも、のんびり、ゆっくり、ぼけーつとしようよ」というメッセージです。学校ではぼけーつとしていては勉強にならないのでそうは表現しませんね。でも、児童館は、遊びというツールを用いる生活の場です。児童館は、それぞれの子どもの心とからだを解き放つことで、子どもが素のままの自分で居られる場所であることを大切にするところですので、何もしなくてもぼけーつとして居ていいのです。ぼけーつとできるということは、子どもたちと私たちが、成績や評価につながらない関係を持つ場だということもあるということもここで強調して置きたいと思います。

あの子いい子だよねえと思わず私たちがつぶやく場面がよく児童館ではあると思うのですが、私たちはどのような意味でこの言葉を使うのでしょうか。冒頭で述べたことと重なるのですが、児童館で言うよい子と、学校で言うよい子

は違うのではないかと私は思っています。児童館テキストV o 1.1 (2P)でも述べたように、絵本作家の五味太郎さんがふたつのよい子像について興味深い語り方をしているので以下に再度引用します。あなたの児童館で言うよい子ってどっちですか。

大人の言うことは素直にきいて、決められたことはきちんと守り、出された問題にはうまく答え、与えられた仕事はだまってやる。

決してさぼったり、ごまかしたりはしない。

それが「かしこい頭とじょうぶなからだ」のよい子です。

言われたことの意味をたしかめ、決められたことの内容を考え、必要があれば問題をとき、自分のために楽しい仕事をさがし出し、やるときはやるし、さぼりたいときはすぐさぼる。

これが「じょうぶな頭とかしこい体」を持った、これもまたよい子です。

引用：五味太郎「じょうぶな頭とかしこい体になるために」  
(ブロンズ新社)

メッセージとともにまとめた子どもの森の目指す姿も参考までに。ここにも子どもの森の子ども観のエッセンスを込めたつもりです。子どもの森で開催する様々な遊びのワークショップやフェスティバル、空間デザイン、利用者サービスの質、安全管理、さらには県内を巡回する情報交換会やいのちのおはなしキャラバンまで、すべての事業の土台の部分で共有される考え方として、外にも内にも明示しているのです。

### 〈子どもの森が目指す姿〉

「子どもの森は、子ども自身が遊び体験を通して、みて、聴いて、ふれて、感じたおどろきと多様な出会いを育む、あらゆる子どもたち、そして親たちのための広場です。子ども自身の自発性、自主性を何よりも大切と考え、一人ひとりの子どもにとっての「大好き」が見つかる、「大好き」と出会える場所、子どもたちの自然な気づきを見守りながら、「楽しさ」をいっしょに共有していける、あたたかく、どこかなつかしい大きな家のような存在となることを目指しています。

## II 遊びと児童館

### II-1 子育て環境を見つめ直す必要性

弘前大学生涯学習教育研究センター 講師 深作 拓郎

#### 1) 子どもの姿は「見ない?」「見えない?」

ここ10年ぐらいの間に、「子どもの姿を見なくなった」「見えなくなった」という声を聴く機会が増えました。少子化やテレビゲームの普及などによる遊びの孤立といったことが引き合いとして出されますが、果たしてそれだけなののでしょうか。

日本には、伝承遊び・集団あそびというものがあります。野外であれば、かくれんぼ・鬼ごっこ・缶けり・花いちもんめ・押しくらまんじゅう・かごめかごめ・石けり、竹馬などたくさん挙げられます。ここで着目しなければならないことは、誰が・どのように伝承していったのか…ということです。

もうお気付きですね。これは、子どもだけの問題ではありません。社会構造の変化が家族や地域の人間関係を変容させたのです。地域の祭りや生産活動などを通して子どもと大人が交わる機会が多々あり、多くのことが伝承されてきました。今日の日本は、都市・地方に関わらず、地域の人々が日常的に交わる機会が少なくなっています。ですので、「子どもを見なくなった」のではなく、「交わる機会が少なくなった」というのが正しいのでしょう。

#### 2) それでも子どもたちは遊んでいる

私は、大学で担当する講義の初回に半ばお遊びの質問をします。その時に必ず入れる項目が「子どもの頃のお気に入りの遊びは」。学生の答えのほぼ60~70%が外遊びや伝承遊びを挙げてきます。大学生ですので少し年代はずれますが、つい1.2年前まで高校生だった人たちです。そこで見えてきたことは、意外





と彼らなりに遊んでいるということです。さらにもう一つする質問が「今の子どもたちをどう思うか」。さまざまな意見が出されますが、こちらは「忙しそう」「時間に追われている」「大人びている」「ゲーム」が代表的なものです。これを見るとどちらかと言えばやや否定的というか既に世代間のズレがはじまっているようにも感じられます。

一方で、卒業して保育や教育現場に出た教え子や現役の児童厚生員、学童保育の指導員さんからお話を伺う機会がよくありますが、そこで共通しているのは「自然発生的に集団で遊べない」ということです。例えば、体育館のような場所に初対面の子どもたちが集ったとしても、個々に遊ぶものの次第に輪が広がっていく…という光景は少ないというのです。シニアリーダーをしている学生は「携帯型のゲームに負けた～」と白旗を出したぐらいです。

子どもたち自身、恐らく集団で身体を動かして心身を開放することの楽しさを感じているはず。でも、それをあえてしないのはなぜなのでしょう。

### 3) ランキングに縛られる子どもたち

日本の子どもたちの自己肯定感や自尊心が低いことは、さまざまな場面で取り上げられてきています。教育学者の佐藤淑子さんの著書『日本の子どもと自尊心』(中公新書)や土井健郎さんの『甘えの構造』(弘文堂)、浜口恵俊『「日本らしさ」の再発見』などに詳しく述べられています。簡潔に言えば、潜在的であろうと顕在的であろうと自尊心が高い方が、対人関係能力や知的好奇心も高まるわけです。しかしながら、謙虚さが望ましい、「うち」と「そと」を上手く使い分ける能力を身につけようとする日本の文化(しつけ)があります。甘えや自己主張は「うち」でと言われますが、実は子どもたちの遊びのなかでは、甘えも自己主張も自然に表出されているのです。それが無意識に発揮できるから面白いのであり、群れたがるのではないのでしょうか。

最近、子どもたちが無意識に仲間をランキングしているという話を聴きますし、その場面に居合わせたこともあります。あえて順位づけすることで、その文脈に依存して対人関係や自分自身の自己開拓の機会を埋もれさせるのではない。しいて言えば、社会構造の変化による人間関係の変化は、子どもたちに

あえて自己を切り開いたりする機会への恐怖感を与えてしまっているのかもしれないと私は考えています。

### 4) 子どもと遊びを考える—大切にしたい視点

「月日百代の過客にして、行かふ年も又旅人也。」松尾芭蕉の『奥の細道』の冒頭に登場してくる一文です。世の移り変わりの早さ、時間は無情にも過ぎ去ってしまうことを唱えています。年齢を重ねるごとに時間が経つのが早く感じるのは有名な話で、心理学では「ジャンナーの法則」というものもあるほどです。

現代の子どもたちも時間に追われ、ゆったりとした時を過ごせなくなっていることが明らかになっています。ベネッセ教育研究開発センターが行った『放課後の生活時間調査』によると、「忙しい小学生」の出現、「時間のセルフコントロール」の乏しさが一層顕著になったという調査結果が出ています。調査に携わった教育社会学者の明石要一さんは、中学受験やお稽古事は親の意思によるものが強く、早い段階から親の敷いたレールを走るという生活スタイルが身についているのではないかと分析しています。これまでも、集団で遊ぶことの重要性はさまざまな場面で唱えられてきました。正木健雄さんは、身体を使った遊びの減少が、成長に偏りをもたらしていることを唱えました。さまざまな場面で、子どもの成長・発達において「3つの間」(時間・空間・仲間)が大切であることが言われてきました。これは確かにその通りだとも思います。危機感を持った大人たちがさまざまな手法を使って子どもたちの3つの間を保障すべく、「地域子ども会」「おやこ劇場」「スポーツ少年団」などさまざまな活動に取り組み、汗を流してきました。

しかし、残念ながら、大人が介入することで生じた問題点も指摘されています。増山均さんは『子ども研究と社会教育』(青木書店)の中で、大人が介入することで、子どもの自発性や自主性を損なう危険性があることをいち早く指摘しました。あえてキツイ言葉で記すと、子どもの遊びの世界にまで「大人のエ





ゴ」が介在してしまっているということです。私たちが子ども期に持っていた子ども自身の時の流れ、子どもの世界をもっと大切にしていけることが何よりも必要なのではないのでしょうか。

そのためにも、私たちは子どもが持つ「内なる自然」に目を向けていくことが大切です。大人はどうしても「良かれと思って」ついつい口や手を出してしまいます。子どもにとっては、無駄なことや失敗することも遊びの一つです。家に籠ってゲームばかりいるようでも仲間との交流はしっかりと行われていたりします。喧嘩も人間関係を学ぶ上では必要な過程ですし、たとえ服を汚しても思いっきり身体を動かして心身を解放することは何よりも必要不可欠な要素です。時には、大人と同じようにのんびりとしてリラックスすることも大切なのです。

時間・空間・仲間とともに子ども自身が創りあげる「内なる自然」「自治」を援助していくための眼差しとその支援の力量を高めることが私たちに一番求められているのではないのでしょうか。

## II-2 子どもの発達と遊び

日本工学院八王子専門学校 講師・学校心理士 神田 奈保子

### 1) 子どもにとって遊びとは…

遊びと聞いてどのような子どもの姿をイメージできるでしょうか。元気に体を動かす子どもたちの姿・仲間と一緒に笑っている顔や泣いている顔・または、大人の手を力一杯引いている子どもたちの姿etcいろいろな子どもの生活場面を思い浮かべることができるのではないのでしょうか。

遊びと一言でまとめても、体を動かす遊びもあれば、自分の世界で見つける遊び、仲間で見つける遊びなど様々です。

遊びについてホイジンガは、“遊びは、子どもだけのもではなく、様々な場面で存在するもの”=「人は遊ぶ存在」であると遊びを定義しました。

この考え方は、当時の学者に大きな影響を与えました。その一人がロジェ・カイヨワです。カイヨワは、“自由意志に基づく自発的な活動であり、遊ぶものの創意にゆだねられる未確定性を備えた面白い活動である。”と遊びについて

定義しました。カイヨワは、ホイジンガの遊び論を引き継いで、遊びを4つの要素に分類しました。4つの要素とは、①アゴン（競争）【運動など】②アレア（偶然）【くじやじゃんけんなど】③ミミクリ（模倣）【演劇・ままごとなど】④イリンクス（めまい）【絶叫系アトラクションなど】です。カイヨワの「自由」「自発」「創意」の遊びの精神は、子どもの育ちをサポートする専門領域「保育」「発達心理学」でも大切にされています。

遊びを絵の具に例えたとしたら、遊びの絵の具は、大人には想像もできないほどの種類の色があるのではないのでしょうか。

子どもは、生活のあらゆる場面で遊びという活動で彩る才能に溢れています。

子どもが遊びで生活を彩ることは、“今子どもができる最高のこと”ということ、大人が大切にしなければいけないのだと思います。

### 2) 子どもの目線に立つ

子どもを取り巻く環境は、時代とともに大きく変化しています。その変化は、仲間の不足・遊ぶ時間の減少・遊ぶ空間の減少などデメリットも多く指摘されています。しかしその反面、変化の中で見いだされる重要な考えやアイデアなども多くあります。

変化の中で見つかる輝きは、“重要なキーワード”になり、問題解決の糸口となります。

現在の子どもの育つ環境において見いだされた輝きの一つに“子どもに合わせた保育”“子どもが主役”というものがあります。

この輝きは、新たに生まれたものではなく保育の基盤として名を残しているモンテッソーリ・シュタイナー・フレーベル・ピアジェなど多くの学者が主張してきたものです。



### 3) 主役は…子どもたち

はじめに、思い浮かべてみてください。

人は、悲しいときどのような行動をするでしょうか。悲しいときに、満面の笑みを想像するのは、難しいでしょう。このように「心と体」は、繋がっています。

心と体が繋がっていることに注目する事は、子どもの生活を充実させる遊びのヒントを紹介する際の羅針盤となります。

## A 乳児期

乳児期は、一般的に0～2歳の子どもの指します。乳児期は、月齢などの影響が大きいのが特徴です。[これなんだろう?][イヤ・イヤ・イヤ!]&#x2D;と2つのトピックスから乳児期の子どもの遊びのポイントをみていきたいと思います。

### 《これなんだろう》

0歳児は、みるもの・触るもの…あらゆるものが初めての体験ばかりです。1・2歳児になると、歩く・走るなど、少しずつ自由に自分の体を動かすことができ、世界が広がります。乳児期の子どもたちにとって毎日は、まさに「これなんだろう」というワンダーランド（不思議な世界）といえるでしょう。

ワンダーランドのまっただ中にいるのを想像してみてください。きっとあらゆるものに興味を示し、「これなんだろう?」という疑問が次から次に生まれてくるのではないのでしょうか。この時期の子どもも同様に、あらゆるものに興味関心を持ちます。「何だろう?」という好奇心は、触ったり、口に入れてみたり、自分の体を通し体験することを促します。

この時期の遊びは、子どもの[興味・関心]から生まれる「体験」が要素として重要になります。中でも子どもは、引っ張る・押す・落とすなど自分でアクションを起こすことで、新しい動きが生まれるもの到大変興味を示します。

よくみられる子どもの姿は、ティッシュケースのペーパーを何度も引き出し喜んだり、絵本などを破いたり食べたりというものがあげられます。どの遊びも、子どもにとってはお気に入りの遊びですが、大人にとっては“困った行動”に入るものばかりなのが特徴です。しかし、子どもにとっては、これらの“困った行動”は、いたずらではないのを忘れてはいけません。

大人は、子どもが見出した“オリジナルの遊び”を共に楽しむことで、子どもの心とからだを育てる“愛情”を育むことができます。大人は、オリジナル



性を崩すのではなく、子どもが“オリジナルの遊び”を楽しむことを満喫していく中で、少しずつ安全に遊びが展開できるよう考え・配慮していくことがポイントではないでしょうか。

### 《イヤ・イヤ・イヤ》

1歳を過ぎると“自分”の存在に気が付くようになります。今まで、周りの大人にされるがままだった子どもも、この頃になると「私が!」と自分の意思を主張するようになります。あらゆるところで「私が!」という姿が現れるため、「わがままになってしまう」と心配になる大人も多いでしょう。しかし、この時期の子どもにとっては、イヤ=やりたくないと決して駄々をこねているだけではなく、チャレンジしたいという“冒険心”だということを押さえておきたいと思います。



この時期の子どもは“いざ、挑戦!”となると…失敗してしまうことも多くあります。

なぜ、失敗してしまうのでしょうか?失敗をしてしまう背景には、気持ちと行動の接続の不十分さがあげられます。つまり「やりたい!」という気持ちに、身体面の発達がついていかないということです。

“興味関心”から育った“冒険心”は、この頃の子どもにとって学びの種であり、遊びの重要な要素です。この頃の遊びには、身近なものに興味を持ちチャレンジする姿が見られます。例えば、大人の真似をし「はい、どうぞ」と食器などを渡す姿、靴を履いたり脱いだり繰り返すあそびなど多く見られます。

そんな姿をみて、大人たちは「助けてあげよう」「やめさせよう」と“正しい”行動や遊び方を伝授しようとしています。

この時期の“冒険心”いっぱいの子どもにとって、時として大人の親切が、子どもの自主性を傷つけてしまうことも多くあります。

初めてのことは、失敗が付き物です。失敗を繰り返し、自分で獲得していく“生きる力”もあります。子どもの「イヤ・イヤ・イヤ」は、“冒険したい”というサインだと思うとサポートしやすくなるのではないのでしょうか。

## B 幼児期

幼児期は、一般的に2～6歳の子どもの指します。幼児期の大きな特徴としては、乳児期の発達に加え、よりダイナミックな動きや細かな動きが出来るようになってきます。

[みて・きいて・さわって]・[一人でできるよ]と2つのトピックスから子どもの遊びのポイントをみていきたいと思います。

### 《みて・きいて・さわって》

2歳から6歳は、感覚・運動器官がより洗礼される時期と言われています。

この時期は、乳児期で培った基礎的な力を、活用し自分の中にとりこむことができます。

感覚・運動器官が敏感なこの時期の子どもは、“体験”というものに“自分なりの意味”を見出そうとします。乳児期は、体験を通して楽しさや面白さを感じてきました。これに加え、幼児期は“なんで楽しいのか”・“何が面白いのか”・“どうしてそうなるのか”と、その意味を見つけようとしています。

「何で〇〇なの?」、「どうして?」など周りの大人に何度も聞く子どもの姿を見かけたことはありませんか?必ずしも子どもたちは、正しい答えを求めているわけではありません。ただ、不思議に思うことを“聞く”という表現を通し、自分なりの答えを見つけようとしていることも多くあります。

子ども自身の答え探して重要になるのは、敏感になっている感覚や運動器官を十分使うということです。感覚の具体的な発達、色や形に気が付く“視覚”の発達、香りとイメージが繋がり表現できる“嗅覚”の発達、その他に“聴覚”の発達、“触覚”の発達、“味覚”の発達などがあげられます。

運動器官の具体的な発達は、走る・跳ぶ・バランスを取る・投げる・指先を使うなど、乳幼児期で培った力を応用させた行動があげられます。

幼児期の子どもは、感覚と運動器官の発達から複合的な遊びを楽しむようになるのが特徴です。よくみられる子どもの姿は、ピーズ通し(触覚+運動)、間違い探し(視覚)、スキップ(跳躍+バランス感覚)などがあります。

この時期のポイントは、“感覚と運動の組み合わせは、多種多様に存在す



る”ということではないでしょうか。大人が選ぶ遊びだけではなく、子どもの積極的な疑問や子ども同士の遊びや、日常生活の中に一つ工夫して何かを加えることで、遊びの意味が深まり、子どもの“答え探し”のきっかけになるのではないのでしょうか。

### 《ひとりでできるよ》

3歳後半になってくると子どもから自然に「もうお兄さんだから。(お姉さんだから)」という言葉が生まれてきます。この時期の子どもは、身につけてきた生活習慣の基礎を十分発揮しようとしています。着替えや片付け、給食の準備や当番など、子どもが大人達と一緒にしていたことを今度は一人で挑戦しようとしています。



このような生活習慣の応用は、遊びの中でも“おままごと”として取り入れられます。

子ども同士の関係は、おままごとをはじめ多くの遊びを共有し、広がってきます。人間関係の広がり、行動面の変化だけでなく、言語面での成長にも大きな影響を与えます。

人間関係が広がることで、友達とのトラブルにも多く出会うようになりますが、トラブルを経験していくことで、自他の違いに気が付いたり、遊びへの工夫が生まれてきます。工夫のひとつに、“ルール”を設定することがあげられます。

子どもの関わりをみると、「これはお約束ね!」と大人の口真似をしながら、仲間同士で確認している姿を見かけます。初めは、簡単なお約束(ルール)も5歳近くになると、2・3個と増えてきます。

この時期の遊びのポイントは、大人が子どもの友人関係を広げるよう子どもの自主性を尊重することや、子どもにとって理想的なモデル=リーダー的なポジションを大切にすることではないでしょうか。決して一方的な指導ではなく、子どもが関わりたい・挑戦したいという意欲が湧くように、“見守り寄り添う”姿勢が重要になります。

## C 児童期

児童期は、一般的に6～12歳の子どものことを指します。児童期の大きな特徴としては、“学ぼうという学習意欲が旺盛になることや、理解する思考能力が高まること、仲間どうしの関係（ギャングエイジ）が行動に大きな影響を与えることなどがあげられます。

[知っているよ、知りたいよ。] というトピックスから子どもの遊びのポイントを見ていきたいと思います。

### 《知っているよ、知りたいよ。》

児童期は、小学生の子どもたちを指します。小学生になり、“授業”という勉強が教育面に加わり、今まで遊びが生活の全てだった子どもたちにとって大きな変化がある時期ともいえるでしょう。

以前「勉強なんて嫌い。何で勉強って大切なの？」と聞かれたことがあります。何で勉強をするのでしょうか？答えは、様々だと思います。ここで押さえておきたいのは、正解の答えではなく…子どもにとってこの質問は、とても正直で意味があるということです。

いままで乳幼児期では、体験を通し生きていく上で基礎となることを多く学んできました。これに対し児童期は、“体験で学んだこと”の先から生まれる“疑問”に対し、より深く考え、謎解きをするのが上手になります。謎解き上手になるからくりには、育ちの場（学校・児童館・家庭）での[学んだことを生活の中で生かして、発見をし、次の学びをする。]という体験と発見の連動が挙げられます。

では、どうやって生活の中で育ちの場での学びを生かすのでしょうか。ここで重要になるのが、遊びです。お忘れではありませんか？児童期の子どもは、幼児期までの生活で“遊び”のプロとして成長しているのを。

学習能力が高いと言われている北欧では、学校での学びを家庭や子ども同士の中で“ゲーム”感覚で復習をしている一面があります。また休日などを使い、家族との時間の中で郊外へ出かけ、体を動かしたりしつつ、物事の原理や仕組みなどを学んでいくそうです。

北欧では、このように遊びや体験を通し“考える”・“発見する”という学びの基礎となる心の教育が身近にあると言えます。児童期の特徴である、“学ぶ意欲”を育てるのには、とても有効であり、子どもにとって負担が少ない方

法です。

物事の原理を知ることは、OK・NGと決して評価をすることが目的ではなく、“考え、本質を知り、楽しむ”過程が重要となってきます。

児童期の子どもは、遊びの中で「楽しむ」という充実感・「もっと知りたい」という探究心・「なるほど」という発見など、子どもが今までの成長過程で身につけてきた“生きる力”を膨らませることで、成長していくのではないのでしょうか。

また児童期は、具体的に大人が手本などを示すと子どもは正確に行うことができるようになるのもこの時期です。大人の背中が子どもにとって重要な学びとなります。大人は、教え込むのではなく子どもの“心”を見守る関わりを持つことが要となるのではないのでしょうか。

現代、子どもが育つ環境は「外系」から「家系」に変化しています。「家系」は、屋内で遊ぶことが多く、一人遊びの時間が増加する子どもたちをいいます。「外系」は、外で思いっきり体を動かし、仲間と時間を共有する子どもたちをいいます。決して「家系」が、悪いわけではなりません。しかし、「外系」は、「家系」に比べ社会性やコミュニケーション力などが育っているといわれています。



「外系」の代名詞は、“仲間との遊び”です。子どもたちは、仲間と遊ぶことで役割やオリジナルのルール・責任感・信頼感など社会性を身につけます。子どもたちが仲間との遊びを通し様々な社会性を学ぶことは、これから成長していく中で出会うであろう多くの扉（課題）の前で重要な“鍵”になります。

“鍵”は、大切なものを守る役割と共に、切り開く道具でもあります。社会性という“鍵たち”は、仲間や自分・家族などを“守り”、問題を解決する際の力となり、未来を“切り開く”のではないのでしょうか。

「家系」の環境不足や経験不足を解決するためには、「外系」の要素でもある“仲間たちと遊び”を通しながら、多くの可能性を手にすることが要ではないのでしょうか。



#### 4) 心に寄り添う

乳児・幼児・児童期と3つの段階に分けて、発達心理や保育学を中心に遊びのポイントを見てきました。

子どもにとって遊びは、どの時期も“身近にある可能性を広げる場”になります。子どもは、考える力、表現する力、コミュニケーション力、身体能力など遊びから学びとっています。大人は、子どもの可能性を信じ、決して先取りをするのではなく、“子どもの心に寄り添い”ながら見守り、時にサポートする“名黒子”が理想の姿ではないでしょうか。

## II-3 児童館での遊び

弘前大学生涯学習教育研究センター 講師 深作 拓郎

### 1) 児童館での遊びの支援とは

前の章でも触れましたように、子どもたちの成長・発達において「遊び」は重要な意味をもたらしています。心身の健やかな発達にもっとも大きな力となるからです。しかしながら、偏差値・ランキング重視の社会の渦中に巻き込まれており、日々の生活においても心身を解放する機会が非常に少なくなっています。特に機会化されたテレビゲームなどは、明らかに大人によって意図された枠の中での活動であり、遊びの本質からみれば不自然さは拭えません。

遊びの本質を踏まえ、その魅力や楽しさを子どもたちに伝えること、そして子どもたちが十二分に心身を解放して遊べる環境を提供していくことが児童館の中核的役割なのです。

児童館は、児童福祉法第40条で定められた児童厚生施設で、「児童遊園、児童館等児童に健全な遊びを与え、健康を増進し、情操を豊かにすることを目的とした施設」と定められています。そして、児童福祉施設最低基準第39条にて、「児童厚生施設における遊びの指導は、児童の自主性、社会性及び創造性を高め、もって地域における健全育成活動の助長を図るようこれを行う」と定められています。つまり、児童館では、子どもたちの健やかな成長を目指した「遊びの支援」を図っていくことが求められているのです。

では、「遊びの支援」について考えていきましょう。

「支援」という言葉の意味は、既におわかりだと思いますが「支えて援助する」ということです。これに遊びという言葉を加えると、子どもたちがイキイキ・ワクワク・ノビノビと遊べるような環境整備や場所の確保であり、キッカケづくりや動機づけなどが挙げられます。児童館での遊びの主体は、子ども自身にあり、私たち大人はその支援をするというスタンスに立つことが求められてくるのです。

### 2) 「遊びの支援」で心掛けたい目標

遊びの主体は子ども自身であり、遊びの効果は計りしれません。目標も当然多岐にわたります。つまりは、「遊び」という活動を通して、子どもたちの自主性、社会性、創造性を高め、心身の健康増進を目指しているわけです。

ここで、児童厚生員が「遊びの支援者」として心掛けたい視点を5つ提起したいと思います。

- ①子どもたち自身の主体性を尊重した活動のあり方を常に考える。
- ②遊びの本質や子どもの特性を的確に理解し、子どもたちの内発的な活力を導き出すとともに、安全性にも十分に目配りできるようにする。
- ③遊びやさまざまな諸活動を通して、仲間集団の形成や地域の多様な人々との交流や関係を構築する。
- ④子ども集団の組織的な活動を支援し、子どもたちの自主性・社会的な活動を育む。
- ⑤子どもたちの教育文化活動に必要なさまざまな素材を提供し、活動を通して子どもたちの文化活動の促進を図る。

遊びの支援は一つのパターンではありません。子ども一人ひとりの個に応じた「言葉がけ」や「距離感」を把握することが必要です。それに応じた支援の方法が必要になってきます。このように、児童館での遊びの支援にあたっては、子どもの特性、遊びの本質を的確に理解すると共に、「遊びの支援」のあり方について、絶えず模索しながら実践していく姿勢が何よりも大切なことなのです。



### 3) 仲間集団を育む大切さ

「子ども集団の組織化」の大切さは理解していても改めて考えてみると…。子どもの仲間集団について、簡単に説明しましょう。

仲間集団の最盛期は、おおよそ7歳～11歳ぐらいの児童期と言われ、別名「ギャングエイジ」とも呼ばれています。同世代者との対外活動（主に遊び）に強い関心を持ち、徒党を組んで集団活動を展開していきます。

#### ◆この組織の特徴

##### ①ヨコの人間関係

社会的勢力の差異がなく、対等な人間関係である。

##### ②仲間とぶつかる

対等関係にあるので、個々の「価値観」がぶつかりあう発生誘因を内包する。

##### ③きっかけ

遊ぶのが面白い、仲間と一緒にいるのが楽しいから自然発生的に集団化する。

##### ④集団意識の形成

活動を通して、同一集団に所属しているという一体感、共通経験・共通思考から情緒的関係を形成し「我々意識」が芽生える

#### ◆仲間集団では何を学ぶのか

一言で言ってしまうと「社会性」です。でも、幅が広くてわかるようでイマイチイメージしづらいでしょう。具体的には以下の通りです。

##### ①家族集団で培った価値観が修正される

家族集団で通用した態度・行動・価値観などが、否定されたりケンカに発展する。

遊びを通して価値観が修正され、他人にも通用する包括的・客観的な価値観を形成する絶好の機会となる。

##### ②集団的遊戯活動を通じて仲間意識（連帯感・情緒的関係）を形成

遊びを通して仲間意識が芽生える。相手を感じることで相互性・他者性といった対人関係の安定性と情緒的安定感を形成する。

##### ③対人関係能力を形成する

集団の遊びは、相互の協力・競い合い・妥協がなされ、コミュニケーション構造を経験する。また、ゲーム（鬼ごっこ、野球、サッカー）など勝敗を競い合うことを通じて、公平を原則とした競争や規則に従った妥協を経験する。このことから、社会での対人関係能力を培う。

## II-4 児童館職員との座談会



### 「遊びを通して子どもたちにどう関わっていますか？」

これまで、子どもの育ちにとって「遊び」が大切であり、支援する大人が心がけたいことについてふれてきました。実際は、子どもの個性・状態・成長等に応じて、日々さまざまな場面に遭遇するため、わたしたちは子どもとどう関わった方がいいのか悩むことが少なくありません。そこで、長年、児童館の現場で実践されている方から、日ごろどんな風に子どもたちと関わり、どんな思いで成長を見守っているのかお話をいただきました。

#### ●座談会メンバー紹介（五十音順）

不動児童館 佐藤裕規子さん  
(ゆみこ先生)

いわて子どもの森 長崎 由紀  
(ゆっきい)

弘前大学生涯学習教育研究センター  
深作 拓郎さん  
(たくちゃん)

宮守児童館 吉田 敦子さん  
(あっちゃん)

いわて子どもの森 館長 吉成 信夫  
(おんちゃん)



#### ●子どもと向き合うときは、スイッチを切り替えて変身！

座談会は、子どもと向き合うときのスイッチが話題で始まりました。佐藤さんは、仕事用のベルト「変身ベルト」。ゆっきいは出勤途中の坂道。吉成館長はフェイスペイントでひげを書く。吉田さんは、子どもたちの「ただいま～」の声。深作さんはスヌーピーのエプロン。

佐藤：「変身ベルト」をして、お仕事モードの時は、ハイテンション。でも、最後の子が帰り、車に乗り終わると、ドッと疲れが…。



吉成 信夫(おんちゃん)

長崎：どっちも自分で無理に作っているわけでないんですけどね。

吉成：ラジオのチューナーと一緒に、子どもにチューナーを合わせるという感じ。館長室で書類を見ている時の表情が「深刻そうな悩んだ顔をしている」と言われたことがある。(一同、笑)。「でも、子どもと会った瞬間、まったく変わりますよね」と。ひげは、ピエロと一緒に、自分であり、自分でない。

### ●子どもの声・表情から感じ取る

吉田：子どもたちは、必ず事務室のドアを開けて「ただいま～」と帰ってくるので、「おかえり」と返すんです。マシンガントークで始まるか、ぐっと落ち込んできたのか、「ただいま」の声のトーンで聞き分けられるようになってきたかな。厚生員1年目のころは、目が泳いでどうすればいいのだろうと。自分に寄ってきた子だけで精一杯だったが、年数が経って子どもたちと関係ができてきて、やっとわかってきた感じですね。

佐藤：子どもは素直に気持ちをすべて表しますよね。怒られてきたとか、楽しかったとか。お母さんたちも一緒。お母さんがイライラしているとき、「今日はこんなことがあって…」と話しかけてもお母さんの心の余裕はない状態。お母さんに「何かあったの？」と聞いて、一緒にしゃべっているとクールダウンしてくるから、その時を逃さずその日の子どもの様子を伝えると、ニコッと笑って子どもと手をつないで帰ることができる。大人も子どもも、声の感じ、表情でなんとなく気持ちが伝わってくる。その時の一人ひとりを見て、どうフォローするかが大切な？

### ●児童館は自由に遊ばせて放任しているだけ？ ～長いものさしで子どもの姿を考えること、目に見えない子どもとの信頼関係～

吉成：ある児童館で、「ここは放任しているのか？」と言われたそうです。自由と放任が混同されており、何のために自由にしているのか、見えないつながり、信頼関係をどう作っているのか？

佐藤：児童館は生活の場という色が濃い。子どもが大人になっていくために

は、いつも楽しい話ばかりではない。「キミたちの命を家の人から預かっているから、みんなを守るのが一番の先生の仕事。その中で楽しく遊ぶのが児童館だよ」と。時には、子どもを集めて大切な話をすることもあり、「前に先生が立つのは大事な話があるから。終わったら遊べるから、今は聞く時だよ。」と伝える。4月当初は、子どもを笑わせて気持ちを引きつけて話をしていたが、繰り返し「聞く時」「遊んでいい時」を知らせていく中で集中して話を聞けるようになってきた。今は子どもだけでなく、将来大人になり親になっていくという長期展望の中で子どもを見守っている。厚生員というより大人として、その子に伝えるべきことを機をのがさず伝えたい。1年生～3年生になると自己が確立し修正が難しくなってくるので、小さいうちに、人と関わって生きていくためのルールや、いいこと、悪いことを教えておくのも大切。でも、おこっただけじゃダメ。子どもと一緒に遊ぶ中でできた信頼関係をもとに、今は何をしたい時かを知らせていくと、だんだん子どもたちに「聞く力」が生まれてくる。そうすると、集会等で、子どもが騒いだ時にその子を見ると、子ども自身が「あれ？今はふざげちゃいけない時？」って気づいてくれますね。目を三角にはしませんよ(笑)、あくまでもあたたかい目で…。(一同、笑)そして、ちゃんと聞いたら「静かに聞いてくれてありがとう」と声をかけます。



佐藤 裕規子さん  
(ゆみこ先生)

吉田：気持ちを読んでくれますよね。

佐藤：大切なのは普段からの信頼関係ですよ。

この先生は遊んでくれるし、自分のことをわかってくれるという安心感があるからこそ、「いま、ふざげちゃダメかな？」って空気を読んで気づいてくれる。

吉田：(しみじみと) うれしいですね。

佐藤：すると、大人が無駄におこる必要がなくなる。=子どもも厚生員も楽しい!!

深作：大事なキーワードが2つ。長いものさしという言葉を使うんだけど、今より、10年後、20年後の子どもの姿を考えるのが大事だと思う。そのきっかけを提供するのが厚生員。もうひとつは、遊びが主じゃなく、基本は生活。生



活を成り立たせるための遊びなんだよね。

**佐藤：**「空気を読む」が行き過ぎると大人の顔色をうかがう子になってしまうから、ギリギリのラインの見極めが難しい。厚生員は、遊ぶ時、大切な話をする時のメリハリをつけつつ、その時の子どもの様子に合わせて、お父さん役、お母さん役、友だちにもなる。時には「へえ～知らなかった！おしえて～！」と子どもより年下になったり、いろんな立ち位置で子どもと接することも大切かもしれない。



### ●もがいてつかんだこと「遊びの技術はツールでしかない。大事なのは子どもと関係を作ること」

**長崎：**子どもの森がオープンする前の準備室時代に、岩手初のプレーリーダーということで「あなたたちは遊びのプロなんだから、誰もやったことのないようなおもしろい遊びを考えないと！」と県職員の方に言われたんです…それまで私が学童保育クラブで働いていて、泥団子を作ったりして遊ぶのが好きで、子どもが好きで。でも、特別に“何か”ができたわけではなかったんです。一緒に採用されたプレーリーダーは、「絵がうまい」とか得意なことがある人たち。自分には何もなくて…「私に何を求めているんですか！なんで採用したんですか！」って言って、トイレに2時間ぐらいこもりました（笑）。

**吉成：**そこからのつかみ方が早かったよね。それだけたくさん悩んだから、3ヶ月～4ヶ月で切り替えたのだと思う。



長崎 由紀(ゆつきい)

**長崎：**その当時は、とにかくなんでもいいから自分の武器になるものがほしかったんです。そこで、他のプレーリーダーに比べて私のほうができそうかなと思う読み聞かせをしようと。そして、「パネルシアター一式を買ってください」と館長にお願いしたら、「ダメ！」って言われちゃって。

**吉成：**そんなの既製であるだろう、なぜってどうするのって。

**長崎：**私としては、そこから崩せる“何か”キッ



カケがほしかったので、しつこくお願いしました。そしてついにシアター一式をゲット！とにかくあの頃はつらかったです…。

**吉成：**そこからがつかむということなんだよ。自分のやり方で。

**長崎：**大学生にその話をすると「私も得意なことがないんだけど、それでもいいんだ」と感想を書いてくれます。

「今はコレ！」という得意技がなくても、悩めばいつか道は拓けるかと。

**吉成：**みんな、得意技がないとだめなんじゃないかっていう強迫観念があるんだよね。子どもの遊びに得意技はいらない。ただそこにいる子どもたちとどう関係を作るかということ以外に何も無い。みんな遊びを研究したり、ネタを集めたりしてると思うんだけど、大事なのは、子どもとどう胸襟を開ける関係を作れるか。真剣に子どもと同調する大人があまりにいないよね。

**長崎：**今になって思えば、その技は、子どもと関係を作るためのものにすぎなくて、それがすべてじゃないんです。パネルシアターも、人形を操る手さばきがよくて、読み方がうまければ子どもに通用すると思ってたら、それはすぐに崩れましたね。パネルシアターも、絵本も、遊びのためのツールにすぎない、ということにたどりつくまでが、私にとっては長かったです。

**深作：**自分も「また絵本か。めくるのがへたくそ。」と子どもたちに言われて、読んでいるうちに子どもたちと会話が膨らんで読み終わらない。それでいいんだと思う。うまく読めなくて落ち込んだけど、もがくことはすごく大事。実際に子どもと向き合うためにどうするかでもがくんだよね。



深作 拓郎さん(たくちゃん)





## ●集団遊びが育む力 その1 ～周りに目を向け、感じること～



吉田 敦子さん(あっちゃん)

**吉田**：長期休みに大縄跳びをやっている。最初のころは、引っかかった人を責めていて、「人を責めている間は絶対続かないんだよ。みんなで大丈夫、頑張ろうっていう気持ちにならないとダメなんだよ。」と話しました。最初は、30回も続かなかったけど、休みの最後になると400回に。責めていた子が「いける。大丈夫！」「ひっかかったら休憩しよう」と声をかけるようになって、最後は500回達成！その時はみんな大の字になって「疲れた～」って。「絶対みなさんに知らせたいから」と言って、おたよりに

写真をとって載せました。たった縄一本でそんなに子どもたちの気持ちが変わっていくんだと、道具はあまりいらないんだなあと思いましたね。すると、「〇〇ちゃんの次は、〇〇ちゃんがいいんじゃない。」と。だんだん子どもたちが考えるようになってきたということは、周りのお友達に目を向けて観察する力ができているということ。

**吉成**：集団遊びのよさは、周囲を感じることに、つながっていることだよな。

**佐藤**：昔は、ボール1個あれば、サッカー、ドッジボール、缶けりでずっと遊べたけど、最近は、「先生あそぼ」から始まって、先生が抜けてちょっと戻ると空中分解してしまう。遊びが続かなくなっている。友だちと一緒に「遊びを考え、作っていく」ということがうまくできない子が増えてきているのかもしれない。

## ●子どもに周囲に目を向けさせるための独自の工夫

**佐藤**：煙山児童館勤務の時、自分の遊びで手一杯になって、近くでけんかして泣いている子がいても知らんぷりのことが多かった。周囲を感じる力が弱くなっているねと全国大会で事例発表した細川さんと相談し、立ち上げたのが「わんぱくサポーター」です。本来は、係を決めなくても自然にできるはずのこと。本棚の前で読んでいて「じゃまで本がとれない」と言われても「だってここで読みたいもん」と動かない子もいました。「周りにも友だちがいて、みんなも楽しく過ごしていくのが児童館。みんなが気持ちよく過ごすためにはど

うしたらいいか考え、目を向けよう」というのがサポーターの主旨。平成18年の後半から始め、今は4代目。1番上の3年生が、館長からサポーター認定証をもらう。1人1人の存在を光らせ、周りの子どもたちや親御さんにほめてもらいたくて、歴代の子どもたちの顔写真や一輪車検定の結果を玄関に貼っている。この2つに共通してお母さんたちに話すのは、お友達より「できない」「できない」の比較のためじゃないこと。毎日のちょっとした気づき、努力の積み重ねが大切。たとえうまくできなくても、次にチャレンジする気持ちをほめてあげてほしいと伝えています。町内の児童館職員の異動により、各児童館のいい取り組みをみんなで共有しながら、その年の子どもの様子と合わせ、そのままやったりアレンジしたり。日々の活動は、子どもたちの様子を見て、臨機応変にやっていったらいいかなと思う。学校や保育園のようにカリキュラムや指針がないため、厚生員が仲間と力を合わせて自分たちが考えてやっていかなくてはいけない難しさや責任の重さがある。逆に言うと、何にもしづられず子どもと遊びを作っていける楽しさもある。それが児童館の強み。「ただ遊びを見てるだけで楽でしょ」と言われることがあるけど、そうじゃない。

## ●集団遊びが育む力 その2

### ～子ども同士の利害調整～

**佐藤**：月1回、子どもたちから児童館生活で困っていること、やってみたいことなど意見を聞いています。先日、1年生の男子から意見が出て、「ドッジボールをホールでずっとやっているのぼくたちは鬼ごっこができません。はじっこで走ってって言われるけど、『ボールが飛んできて危ないからあっち行け』と言われて鬼ごっこができません。どうしたらいいですか？」と。彼にとっては切実な悩み。みんなに「どう思う？児童館にいて楽しい人と楽しくない人がいるけど、それでいい？」と聞くと、さまざまな意見が。1年生からは「ホールを半分にして分けたらいいと思います。」、3年生は「時間で分けたらいい」など。職員から「時間で分けると遊べる人は遊べるし、遊べない人は他の部屋で遊んで待ってるけどいい？」と聞くと、「それでもいい」と。「何分なら待てる？」と聞き、「15分」で折り合いがついた。最終的には職員から「ドッジボール」「縄跳びやバスケットなどいろんな遊び」に分けることに。職員が画用紙で時計を作ってホールのドアに貼り、来週から始めることにしました。これで絶対決まりじゃなく、やってみてまた何かあったら話しあつ

て変えていくつもり。

**吉成：**森と風のがっこうで、子どもたちがやりたい遊びを考えたときのこと。犬の散歩グループと探検グループに分かれたが、最終的にスタッフが利害調整できず、目がうつろになっていた。犬の散歩グループがどうしてもやりたいと言ったんだけど、犬が嫌がって逃げるんだよね。

**長崎：**やってみたら、子どもが思ったとおりに進まないこともありますよね。

**吉成：**それも含めて、プロセスにつきあわないとおもしろくない。

**佐藤：**思ったとおりに「うまくいかない」ことも大切な学びですよ。

### ●大人が介入しない子どもだけの時間、9ヶ月間で築いた子どもとの関係

**吉田：**私が4月から配属になった児童館は、ホールをはさんで保育園と児童館で、保育園が2時半までお昼寝の時間なので、子どもたちはホールでも外でも遊べないんです。異動が決まった時、1時から2時半までの1時間半をどうすればいいんだろうって重く受け止めていました。行ってみたら、子どもたちはそれが当たり前で苦しんでいなくて、その間に勉強したり、ブロックで街を作ったりして、子どもたちなりにその時間を大事に使っていました。わたしたちは遊び道具の貸し出しはするけど、介入せず、わざと子どもたちだけの時間にしてますね。大人は見守るだけでいいんだ。

それから、男の子が多い児童館だったので、棚の上ののるわ、座るわ、飛び降りるわ、机はいすになるし、3日間はへばりつき状態になり、この子どもたちとどう関係を築けばいいのかと四苦八苦しました。繰り返し、「テーブルはいすじゃないよ」と伝えることが必要で、手作りおやつで子どもたちをひきつ

けたり。禁止になっていた野球は、なんでできないのか理由を一緒に考えて、ホームベースの位置を変えてできるようになりました。ある時、子どもたちの雰囲気ざわざわしている時があって、でも会議で出さなければならなくて。「児童館の決まりが5つあるけど、どんどんいろんな決まりが増えていくのか、5つで済むのかは君たち次第なんだよ。『だめ』と先生が言うのは簡単だけど、それを作らないように



自由に遊べる児童館にするのか、決まりいっぱいでもつまらない児童館にするのかは君たち次第なんだよ。いい子（子どもたちだけで気持ちよく過ごせたらという期待を含めて）にしてたらいいいことあるかもよ。」と言って会議に出かけました。帰ってきたら、「お帰り～。いい子にしてたよ。」とうれしそうに子どもたちが報告してくれ、おやつタイムをとりながら子どもたちとゆったりとした時間を過ごしました。その館には9ヶ月しかいなかったんですが、違った意味で多くのことを学んだ児童館でした。

### ●やりたい気持ちをかきたてるのが遊び

**吉成：**伝統的に子どもたちのぶつかり合いの中から生まれてきた、闘争が変化したのが遊び。やりたい気持ちをかきたてるのが遊びだよ。

**深作：**大人がルールで標準化しようとしている。

**長崎：**夏のイベントで、たき火やどろんこ、水遊びのできる“冒険遊び場”を作りました。だんごを作っている子どもが「これを焼いたらどうなるのかな？」と言うので、「じゃあ焼いてみよう！」ってたき火の上に網を置いて乗せてみました。そうすると、近くにいた大人たちはたいい「焼いて何を作るの？」って聞くんですよ。子どもたちは、何かを作りたいからやっているのではなく、ただ焼いてみたかっただけ。焼いてみたら硬くなって…。子どもはそれだけで満足なのに、大人は「その後はどうなるの？何に使うの？」と、結果や形を求めてしまうんです。大人がそう聞くので、子どもは「何か作らなくちゃいけない」と思ってしまうのかなあって。

### ●集団遊びが育む力 その3 ～子ども同士のぶつかり合い、その時大人は？～

**佐藤：**遊びの中でも、ぶつかり合い、戦いがある。ドッジボールで1年生が遊んでいたら、力の強い2年生がボールをうばった。「どうする1年生？」と思って見ていたら、1年生3～4人が、「ぼくたちが使っていたんだ！返せ」と取り返した。思わず心の中で「よくやった！」とほめました。危険なら止めるけれど、ある程度は見守る。やんちゃな2年生は、いつも力を振りかざし、自分の思うようにやっていたが、自分の言いなりにできない時もあるんだなあと学ぶ。

**深作：**それは大事なこと。やった方も後ろめたさを感じているはずだから。

**佐藤：**大人が間に入って、「だめだよ、返してあげなきゃ」と言うと、逆に不

満が残るかもしれないけど、自分が納得して返したから、その後子ども同士のけんかはなかった。どこのラインで大人が介入するか。危険・けがまで行きそうなら職員の出番だが、ギリギリのラインまで見るのも必要な。

**吉田**：仲裁に入っても言葉はいらぬ。「いなかったから教えて」と言い、状況を教えてもらう。職員「どう思う？」子ども「ここが悪かった。こうすればよかった」職員「どうするの？」子ども「ごめんね。じゃ、終わりだね。あそぼ。」というやりとり。わたしたちは、冷静になる場所を提供すれば、言葉はそんなにはいらぬ。自分たちで解決できるんだから、ちょっと背中を押してあげるくらいで、大人は見守ることも必要なんだと思いました。

**佐藤**：大人がなんとかしなきゃと子どもを呼んで話をしていると、飽きてきて「遊ぼう」となったりする。自分たちで折り合う力を持っていますよね。

**深作**：早い段階から大人が介入するから、大人がなんとかしてくれると頼っている部分があるんだよね。

**佐藤**：見守る勇気がある。大人が行って納めたいけど、がまん。

**吉田**：子どもとのやり取り。子ども「先生、〇〇ちゃんがこうしました」職員「言えたからすごいじゃん。言い返してきなよ！」子ども「そのまま言ってきたよー」。

**佐藤**：子どもは気持ちを聞いてもらっておさまる。自分のことをわかってくれる人がいればOK。

**長崎**：大人がやりすぎてしまうんですね。見守っているほうがむしろ大変かも。

**佐藤**：愛ある見守り。行きたいけど、見てみぬふりする勇気も大切。つらいけど…。

**吉田**：見てないように、他のことしているようにしてるけど、ちゃんと見てるよ。

**佐藤**：そう、背を向けていても気持ちは子どもの方にアンテナを向けていますね。

### ●子どもの本音が聞ける時間

**吉田**：長期冬休みで、朝子どもたちがいっぱい来るまでの間、部屋があったまるまで、ストーブの周りでごろごろしている30分くらいの時間がすごく好きで…。その時、「お父さん、お母さんがね…」と子どもの本音が聞ける。人がいっぱいいないからこそ言える。「学校の先生に怒られると『なんで』って反抗したくなるけど、児童館の先生だと納得できる。ぼくたちが悪いときしか怒らず、素直に悪いと認められる」と聞いて、すごくうれしかった。気持ちは通

じてくれてるんだなあって。

### ●地域に開かれた児童館を目指して

**佐藤**：全国大会（※注）を通して、人とつながることの大切さ、「自分からつながりを作る勇気が必要」ということを学んだ。これを機に、地域の方と一緒に遊ぶ「オープン児童館」を企画した。「参加者は1人でも2人でもいい」と思っていたら、地区の回覧、町の広



報等のおかげで当日は15人!!しかし、計画を立てていく中で気づいたことは、「児童館を知ってもらうための行事」ではなく、「児童館での遊びをきっかけに、子ども・家族・地域の人たちがつながっていったらいいな」ということ。例えば…児童館で一緒に遊んで友だちになった子どもとおばちゃんがスーパーで出会い、声をかけ合う。すると、その子の親も一緒に話に加わり、おばちゃんと知り合いに…。そんな小さなつながりがどんどん広がっていったら、孤立した家庭・孤立した老人は減っていくのかもしれない。遊びを通して、「子どもの育つ力」をサポートし、心の安定をはかっていくことが将来その地域を支える力につながっていくような気がする。子ども・家族・地域の力が弱くなっている今だからこそ、児童館厚生員は「遊び=笑顔」の力でそれぞれを支え、つなげていく「きっかけ」になっていきたい。子どもだけでなく、すべての大人も遊びを楽しめるのが児童館!!みんなが笑顔になれるように。

※注：第9回全国児童館・児童クラブ岩手大会

「子どもに関わるオトナはみんな集まれ!～みんなでつなぐ、しなやかで丈夫なネットワークをつくろう～」をテーマに、2日間（平成21年10月17日～18日）にわたって盛岡市アイーナで開催され、総参加者約780名が、子育て環境づくりのコア施設としての児童館・児童クラブの役割や機能について学び合いました。





## Ⅲ これからの児童館に期待される役割

### Ⅲ-1 地域の児童福祉の拠点としての児童館

弘前大学生涯学習教育研究センター 講師 深作 拓郎

#### 1) 児童福祉としての児童館

児童福祉法の第1条では、「すべての国民は、児童が心身ともに健やかに生まれ、かつ、育成されるよう努めなければならない。」「すべて児童は、ひとしくその生活を保障され、愛護されなければならない。」と定め、すべての子どもへの健全に育つことを保障することをうたっています。児童館は第40条に定められた「児童厚生施設」で、保育所（同39条）や児童養護施設（同41条）と同様に「児童福祉施設」の一つとして位置付けられています。

保育所や児童館は、子どもたちの成長・発達の助長を目的としていますので、教育の要素も強く含まれています。保育所を例に例えると、「養護と教育の一体性」が保育理念の一つに掲げられています。

同様に、児童館においても教育的な視点と福祉的な視点が必要となってきます。それは、子どもの育ちにおいて地域に密着した施設として、地域の子どもと保護者を援助していくという役割が必要になってきます。いわゆる「ソーシャルワーク」と呼ばれるもので、社会福祉援助技術とも言います。今日の社会生活を送る上で、子どもやその家族にもさまざまな問題があります。「気になる子」「気がかりな子」に対してどのような援助をするのか、情報を収集して考察して、児童館内で対応していくのか、それとも関係機関との連携が必要なのか等の見極めるための知識と技術が必要となってきています。

フェリックス・P・バーステック『バーステックの7原則』

- ①個別化、②受容、③意図的な感情表出、④統制された情緒的関与、
- ⑤非審判的態度、⑥利用者の自己決定、⑦秘密保持

#### 2) 児童館におけるソーシャルワーク

児童館で求められるソーシャルワークとはどんなことでしょうか。ここでは3

つ取り上げたいと思います。

#### ・「ケースワーク」（個別的援助）

児童館を利用している子どもや保護者を中心に、個と個の関係を基本に相談に応じ、ともに問題解決にあたることを意味します。簡単に言ってしまうと「相談を受ける」ということです。

#### ・「グループワーク」（集団的援助）

遊びの支援につながってきませんが、その集団の中で、一人ひとりが役割を担い、存在意義を感じることで、相互の存在を認め合い自分自身も自信をもてるように援助することです。児童館の現場では特に意識しているところでしょう。

ここで児童館職員が大切にしなければいけない視点として3つ挙げておきます。1つは、一人ひとりへの目配りをしつつも「集団の中の個」の存在としてみること。2つめは、プログラムの実施にあたっては、その子どもの持つ能力が発揮できるように考慮すること。3つ目として、子どもの動き、特筆すべき言動やつぶやき、児童厚生員が援助したことなどを記録にするように心がけること。

#### ・「コミュニティワーク」（地域活動への援助）

児童館は、その地域にある施設ですので、地域に根ざした活動をするように心がけることが大切です。児童館の活動が地域全体に浸透させるためにも、一方通行的な情報発信に留まらず、地域の特色や抱える課題も捉えた実践を行い、さまざまな場面で地域との関係づくりも心掛けていくことで、信頼関係が構築できるのです。地域の人から「実は…」という話をしてくれるようになれば、地域の一員として認められた証かもしれません。

#### 3) 児童館での相談活動

児童館では、子ども自身からの相談はもちろんのこと、保護者や学校などの関連機関、地域からも情報提供や相談があると思います。やはり児童館は「気軽に相談できるという雰囲気」が何にも勝ることでしょう。微笑ましい内容の相談だけであれば良いのですが、そればかりではありません。





心からSOSを発信していることもあれば、保護者からの相談もたくさんあることでしょう。『バイステックの7原則』で紹介したとおりなのですが、相談に応じる場合に児童館職員が特に配慮すべき点を紹介しておきます。

#### ・場所に配慮する

ついふらりと立ち話程度のこともあれば、個人に関わることや深刻な問題もあります。児童館は地域の子どもたちが来館する場所ですので、内容に応じて事務室や静かな場所（相談室や図書室など）を使うように配慮することが大切です。

#### ・解決できること、できないことを理解する

子どもの育ちに携わる専門家ではありますが、いわゆる専門的なトレーニングを受けたカウンセラーではありません。相談の内容によっては、解決できないことがあると思います。内容によっては専門機関との連携を図ることも必要です。何よりも、一人で抱え込まないようにすることが大切です。

#### ・相手が何を求めているのかを把握するように努める

単に話を聴いてほしい場合もあれば、専門的なアドバイスを求めている場合もあるでしょう。相手の求めていることを汲み取り、それに応じて、知識や情報を提供したり、別な考え方を提示したりすることが大切です。



### Ⅲ-2 地域の中で果たすべき児童館の役割

いわて子どもの森 館長 吉成 信夫

児童館はあまりにも当たり前のように昔から地域にあり続けてきた施設なので、子どもが利用しているご家庭は別にして、関わりのないひとにとってはその意味や可能性をイメージしにくい施設だと思います。でも、関わりがある場合でも、「子どもと遊んでいるだけでお金になっていいですねえ」という皮肉

交じりの言葉を親御さんから投げられて悔しい思いをした児童館職員の話をこれまでどれだけ聞いたことかわかりません。「児童館の中でしか見せない子どもの本当の表情、喜びも悲しみにも私たちは立ち会っているんですよと心の中では思っただけどうまく説明できなかつたのよね」と悔しそうに語ってくれた職員の方もいます。

今回のテキストのテーマとも関連しますが、私たちは当然のことながらただ遊んでいるだけではありませんね。遊びを通じて子どもたちと全身で関わり、子どもたちの言葉にならない声を聴き取り、ときには子どもたちの凍えた心を溶かし、子どもたちの発達を見守り続ける大切な役割が児童館には本来あることを私たちは忘れてはいけないと思います。

昭和22年に国が制定した児童福祉法第40条の中で述べている通り、児童館は遊びを通じて子どもの健康を増進し、情操をゆたかにする施設です。0歳から18歳未満までを広くカバーし、いつでも誰でも自由に来館できる子どものための総合的な施設として規定されていたことがわかります。敗戦後の混乱収まらぬ時期に、国家レベルで子どもの未来を真剣に構想しようとしたものであったことには本当に驚かされます。

#### 1) 遊びの提供から子育て支援へ

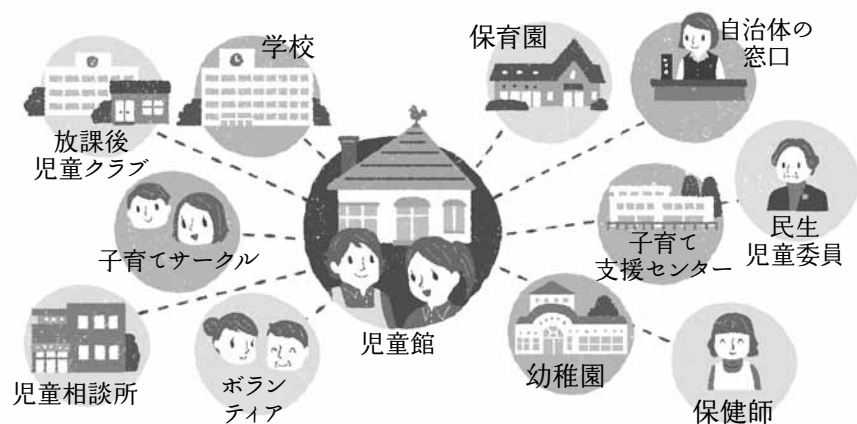
遊びはおとなのレクリエーションとは本質的に異なるものです。みなさんよくご存じのとおり、子どもが生きようとするすべての意欲をかきたてるのが遊びだからですね。その遊びを取り上げてしまったら、子どもは子どもでいられなくなってしまいます。

私自身も、これまで6年間、県内各地で子どもの森が70か所を越える会場で開催してきた「情報交換会」（車座になって自由に本音で語り合う場）を通じて、教育と福祉の領域を越えて、各地の現場支援者である児童館や放課後児童クラブの職員の方々の悩みや課題にふれ、ともに解決方向を考えてきました。気になる子、発達障がいを持つ子、虐待を受けている子。ふつうのよい子だけれど課題のある子など、悩んでいる様々な子どもたちがどこにでも必ずいます。悩みを抱えながら誰にも話せない、相談できないで耐えている場合も。この子どもたちが自由に立ち寄れて、友達と出会えて、素のまま楽しく過ごせる居場所としての児童館という存在をあらためて今の時代の子どもの課題に応える形に位置づけ直すことができないのでしょうか。児童福祉法に明記さ

れている遊びの提供＝児童館という枠組みを越えて、子育て支援の地域拠点施設として、子どもや親からの相談を受け止め、地域内に点在する子どもに関わる施設やひとをつなぎあうセンター機能を持つ方向へと進化させることができれば、どれほどの子どもたちや親たちが元気になれるかわかりません。

## 2) 児童館を地域のつながりをうながすコア施設に

児童館の役割を変えるためには、その根拠になる児童福祉法第40条を発展させる必要があるはずですが。児童館職員の専門性もソーシャルワーク的な方向を加えながらさらに向上させることが求められでしょう。そうなれば人材の配置も運営の方法も勤務体系も変わります。国内4700か所、県内120か所にある児童館が、放課後児童クラブや学校、自治体の窓口、保育園、子育て支援センター、保健師、民生児童委員、幼稚園、児童相談所、子育てサークルやボランティアなどつながりあうことで、子どもや親をサポートする予防としてのセーフティネットが有機的に結ばれていく姿を想像してみてください。今一番大切なことは、縄張りや領域を越えて、お互いを知りあい、お互いの「信頼」を軸にして、子どもに本気で関わるひと同士が互いの領域を越えてつながりを結びあうことです。



日常的な課題や問題を率直に話し合える場は子どもたちに必要ですが、それは子どもたちに日々関わる私たち児童館、放課後児童クラブ職員自身がヨコにつながり、話し合いを通して情報を共有する場が必要なのです。予防的な意味

でのネットワークがつながっていけば、子どもたちは地域の中で見守られて行くのです。見張りや監視ではない、あたたかくゆるやかで多様な見守りの目。児童館が単独でやれることにはおのずと限界があります。その限界を見極めながら、地域の中で相互に補完しあう関係の核（つなぎ手）として児童館の必要性を理解してもらうための努力を私たちはあらゆる場面で働きかけていくことが求められます。

県や自治体も含めてみんながそう願うならば、岩手の子どもたちの環境は必ず変えられます。この夢を実現させるための動きを諦めずに県内の児童館のみなさんの力を合わせながら継続して行きたいものです。

## III-3 児童厚生員に求められる資質

弘前大学生涯学習教育研究センター 講師 深作拓郎

### 1) 児童館の意義・児童厚生員の役割

児童館は、その地域に居住するすべての子どもと保護者が主たる対象となります。世代間交流といったことを考えると、高齢者や障がい者、学校、その他機関で働く人といった地域に関わる人々すべてを対象として捉えるべきなのかもしれません。それは、遊びを中心に生活全体を観ることが何よりも大切だからです。

それは、子どもの成長・発達、日々の子どもの生活の営みすべてが関係してくるからです。教育学者の宮原誠一さんは『教育と社会』という本の中で、人格形成において「自然的環境・社会的環境、個人の生得的資質、教育」の4つが働いており、前二者はごく自然に成長していくが、それに任せてばかりいると良くも悪くもなる。そこに一定の方向づけをするのが教育の営みであり、「教育は形成の一要因であって前者が後者にとって代わることはできない」と述べています。つまり、学校教育だけを意識しても偏りが生じるのと同じく、児童館で子どもに携わる私たちも「子ども」と「遊び」だけを意識しすぎていると偏りが生じてしまうのです。

児童館で取り組む活動は、育つ主体である「子ども」自身を根底に据えた活

動を展開していくことを意識しなければなりません。子ども同士はもちろんですが、地域のさまざまな人々との交流はもちろんのこと、自然、文化、風習、産業といった「地域」そのものに出逢い、触れあえることで、地域の一員であることが自覚できる、その拠点としての意義や役割を的確に把握し、実践していくことが児童館の意義であり、児童厚生員の役割として求められることなのです。

## 2) 子どもが主体になる

ちなみに、『子どもの権利条約』はご存じでしょうか。1989年11月に国連で採択された国際的な条約で、日本は1994年に批准しました。2009年は、権利条約制定20周年・日本国批准15周年でした。もう一つ言うと「児童福祉法」制定60周年でもありました。この2つの条約・法律に共通する点がいくつかありますが、一番注目すべき共通点は「理念」です。その理念とは、子どもの健やかな育ちの環境を整えるための大人の役割を規定しているということです。例えば、第3条では「子どもの最善の利益」、第12条「子どもの意見の尊重」、第31条「休息、余暇、遊び、文化的、芸術的生活への参加」を保障していくことが定められています。一部のマスコミや大人たちは「子どものワガママを増長させる」と誤った解釈をしているようですが、真実とは全く違います。

ここで大切にしたい視点は「子どもが主体になる」ということです。成長・発達する主体は子ども自身にあります。児童館の立場で言えば、子ども自身が主役となって遊びを中心とした放課後の生活の中身を創り出していく。特に、子どもたちの放課後や休日は、本来であれば大人がほとんど関与しない自由なひとときであり、遊び自体が誰にも強制されない自由意思に基づく活動なのです。経験も知識も乏しいからこそ大人の関与が必要なのですが、だからと言って、子どもの世界に大人が君臨して良いというわけではありません。

児童館の活動を通して、私たちは遊びを通して子どもの内面にある育つ力を引き出していくことが求められています。そのためには、子ども自身の内面に潜む「想い」や何気ない一言の「つぶやき」に敏感にならなければなりません。それはなぜか。表現力や語彙力に乏しい子どもたちだからこそ、子どもの声、特に「声なき声」に耳を傾けてその想いを汲み取ることが何よりも必要なのです。

## 3) 子どもとの関わりから学ぶー児童厚生員の人間性ー

「子どもに関わる資質は何ですか?」「私は子どもに関わる職業に向いていますか?」とよく質問されます。その時に私は「『子どもに寄り添う』『声なき声を汲み取る』ことができるように努力するチカラ」と答えます。「子ども主体」「子どもと共感する」、これは頭では理解できていても容易なことではありません。子どもに関する知識や遊びの技術をたくさんもっていてもあまり役立ちません。私たち大人も同じ人間でありその時の感情や体調があります。信頼関係をコツコツと積み重ねて築いていく過程を経て発揮されるのです。ですが、自由来館の児童館では、初対面の子どもたちも遊びに来ることでしょう。そういう場面では、特に瞬時に空気を創る場面も出てきます。また、子どもたちはしばしば「ためし行動」をしてくることもあります。そこで必要となってくる力量が、自分らしさを発揮することで子どもを惹きつけられる力です。喜怒哀楽といった感情を豊かに表現できる力(自分をさらけ出す)、相手の表情や仕草を読みとる細やかな洞察力を培う努力も必要です。この過程を経て、自己をよく覚知することができるでしょう。自己覚知をすることで初めて子どもの内面と向き合えると言っても過言ではないかもしれません。

## 4) つながる力・つなげる力ー成功例からは盗む、失敗からは学ぶー

先ほども述べたように、遊びを通して子どもたちがさまざまな物事と良好な出逢いができるようにすることが児童館の意義であり、児童厚生員の役割です。つまり、児童厚生員は、児童館を拠点に、子どもー保護者ー地域の大人ー地域の機関とつながりを持ち、それぞれをつなげる力が求められてくるのです。そのためには、地域の特性(地域性)、保護者の状況などを把握する力、それを分析する力と判断力などを培っていくことが必要なのです。私は学生に「成功例からは盗め、失敗からは学べ」と良く言います。常にアンテナを立てて情報をキャッチする力、面白そうと思ったことは実践してみる。そして必ず振り返り・反省をして改善していくという姿勢、ただ単に年数を重ねるだけでなく、常に自分を問うひたむきな姿勢、一生懸命な姿を子どもに見せたか否かが何よりも大切な資質なのではないでしょうか。





## \* あ と が き \*

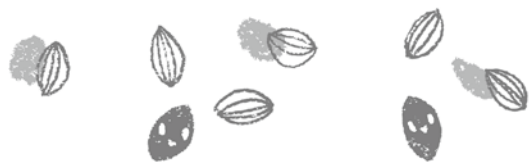
いわて児童館テキストは、児童館・放課後児童クラブ等職員だけでなく、子育て中の親御さんなど、子育て・子育てに関わる沢山の皆さんに活用していただくことを念頭に置いて編集をしました。

児童館はなぜ遊びを通して子どもの豊かな育ちを支援する施設なのか。この一番本質的な問いに少しでも迫りたいと考え、5冊目となるテキストのテーマは1冊目で取り上げた内容を少しでも深める形になったのではないかと考えております。

いわて児童館テキストの作成にあたりましては、沢山の皆様にご支援、ご協力をいただきました。弘前大学生涯学習教育研究センター講師・深作拓郎さん、日本工学院八王子専門学校講師で学校心理士の神田奈保子さん、座談会でお話いただいた不動児童館・佐藤裕規子さん、宮守児童館・吉田敦子さん、本当にありがとうございました。子どもの成長を見守る奥深さ、楽しさを実感できるテキストになったのではないかと思います。

テキストは当初予定した5冊を刊行したことで、一応の完結となります。子どもたちを中心に据えて、子どもたちの発達という縦の視点を大切に、子どもたちと向き合っていくために、皆様の糧となれるような情報をこれからも発信していきたいと思っております。今後ともどうぞよろしく願いいたします。

岩手県立児童館 いわて子どもの森  
館長 吉成 信夫



## 岩手県立児童館 いわて子どもの森

豊かな自然環境の残る奥中山高原西岳山麓に全国で22番目の大型児童館として平成15年5月5日にオープン。「おとも子どもも、のんびり、ゆっくり、ぼけーっとしようよ」を基本コンセプトとして、子どもたちの心とからだのびのびと解き放たれる環境づくりを第一に、五感を通して楽しみながらの遊びとまなびの体験ができるようソフト主体による館運営の考え方を開館当初より一貫して取り入れているほか、県内全域の児童館、放課後児童クラブ等職員の研修、子育て・子育てネットワークづくりにも精力的に取り組んでいる。

所在地：岩手県二戸郡一戸町奥中山字西田子 1468-2

TEL：0195-35-3888 FAX：0195-35-3889

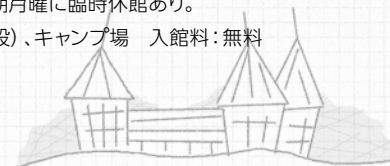
URL：http://www.iwatekodomonomori.jp/

開館時間：午前9時～午後5時（季節により変動あり）

休館日：火曜日、祝日の翌日（いずれも平日の場合）、12/29～1/3

他に年4回の整備休館、冬期月曜に臨時休館あり。

付属設備：まんてんハウス（自炊宿泊施設）、キャンプ場 入館料：無料







いわて児童館テキストVol. 5

平成21年度発行

執筆協力

弘前大学生涯学習教育研究センター 講師 深作 拓郎さん  
日本工学院八王子専門学校 講師・学校心理士 神田奈保子さん

企画制作

県立児童館いわて子どもの森  
〒028-5134 岩手県一戸町奥中山字西田子1468-2  
TEL 0195-35-3888 FAX 0195-35-3889